



Title	弥生時代における土器の製作技術交流
Author(s)	西谷, 彰
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1999, 33, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

弥生時代における土器の製作技術交流

西 谷 彰

1. はじめに

弥生時代における後半期は、広域にわたる交流が顕著となる時期である。西日本にその状況を見た場合、様々な文物移動が認められる(寺沢1985他)。ここで扱う土器についてもその状況は例外でなく、とりわけ瀬戸内地域の土器は、大きく東西に動いていることが判明している。単に土器が移動すると言ってもその様相は多様であり、その背景にある人の移動のあり方に違いがあることは推測しうる。

本稿では、弥生時代後半期における瀬戸内、近畿両地域間¹⁾の土器交流を取り上げ、土器移動そのものや製作技術の移動から導かれる人の移動の実態について検討する。さらに集落動向についての検討を加えながら、この時期の人間移動を生み出した背景についても論及してみたい。

2. 研究略史

弥生時代後半期の土器文化における近畿と瀬戸内の関係については、まず土器製作時の回転台利用への依存を示す凹線文という要素に注目した佐原真氏の指摘にすることが出来る(小林・佐原1964)。そこでは、畿内、中国・四国地方の凹線文土器を「一体のもの」と捉え、その広がりの中で凹線文の発生地を畿内地方であると考えた。しかし、その後の資料の増加や研究の進展(編年の再構築)に伴って、この見解が見直されることと

なった（井藤1982a、深澤1986、溝口1987a他）。いずれも、第一の修正点はその発生地が主に瀬戸内地方にあるということであり、筆者もこれらの見解に賛同する。

一方、弥生土器における交流の実態論は、地域性を抽出するものから人や集団の交流に及ぶものへと進展した（都出1983b、溝口1987b他）。そして、深澤芳樹氏は弥生土器の地域性を論じる中で、土器の表層的要素と基層的要素を分別し、土器に表れる交流の重層性を指摘した（深澤1986）。

この他、両地域の交流については巨摩遺跡（東大阪市）出土の吉備系土器に注目した論考などが挙げられる（井藤1983、藤田1984、前田1988他）。

以上のような研究の流れは、中期を中心とした近畿内の様相を、そして凹線文土器文化の広がりを明らかにしてきた。しかし、両地域間における交流動態や変遷を十分に把握するには至っていないものと思われる。以下では、深澤氏の示した基層的要素という分析視点を採用し²⁾、この点を考察したい。

3. 瀬戸内と近畿における土器交流

(1) 土器交流の概観

中期後半における両地域の土器は、凹線文という回転台を利用した施文方法で様式を特徴づけるが、製作技法や調整法、凹線文を除く施文に関しては明らかに異なる状況が見られる。その中で、直接的な両地域間の交流については、これまであまり深く論じられてこなかったが、中期から後期への移行期を中心として、徐々にではあるがその様相が明らかになりつつある。その一端として、近畿における瀬戸内系土器の存在は、まず土器そのものが搬入されるという状況で見られるが、さらに文様や形態、調整法といった属性の表出からも窺われる。したがって、ここでは両地域の土器変遷を比較しながらその様相を概観してみたい。

甕の変遷

まずは、両地域の甕形土器を見ることにする。これは既に指摘されていることだが、中期から後期への移行期において近畿の甕に瀬戸内で一般的な製作技術が用いられるという状況（佐原1968、都出1974、森岡1982、井藤1983他）を確認するためである。

瀬戸内（備前）

中期後半の甕は上方に拡張した口縁部端面に明瞭な凹線を付し、胴部上半に最大径を持つ。胴部上半には瀬戸内に特徴的な刺突列点文を付すものが多く見られる。外面調整は上半部をタテハケ、下半部をタテミガキし、タタキが見られるものも存在する。内面調整は上半部をハケ、下半部をタテケズリとする。

後期前葉の甕は、口縁部端面の施文部が縮小化し、頸部の屈曲度が弱まる。外面調整は前段階の様相も残しながら、ハケによる最終調整が主流となる。一方の内面調整はケズリの範囲が上半部にまで及び、多くは上半部を横方向に削る。

後期中葉になると、器形全体は縮小化し、口縁部は外反して端部をおさめるものが主体を占めるようになる。内外面ともに、調整は前段階の様相を受け継ぐかたちとなっている。

後期後葉では、口縁端部が上方に拡張する。肩部はやや屈曲するようになり、全体的に球形化の傾向にある。内外面ともに、調整は伝統を受け継ぐ。

近畿（摂津・河内）

中期後半の甕は、断面形「く」の字口縁を呈し、端面に凹線文を付すものとそうでないものが見られる。外面調整は上半部をタテハケ、下半部をタテケズリするものとその後タテミガキを施すものが見られる。また、一部に左上がりもしくは水平方向のタタキが見られる。内面調整はハケを

主体とするが、若干ケズリを有するものが存在する。胴部最大径はやや上位に位置する。

後期前葉の甕は、器形全体が縮小化し、口縁部端面も縮小する。外面調整はタタキを残すものが目立ってくるが、多くはハケによって消されている。内面調整はケズリが多く見られるが、ハケ・ナデも見られる。胴部最大径は中位へ移行する傾向にある。

後期中葉になると、小型化・球形化が進む。近畿では最も量的に安定して見られるタイプである。製作技法では、「底部輪台技法、分割成形技法」（都出1974）が顕著となり、その確立が窺える。外面調整は前段階同様にタタキ後のハケが見られるが、タタキのみのものが増加してくる。内面調整は前段階に見られたケズリも存在するが、基本的にはハケが主流である。

後期後葉では球形化がさらに進む。製作技法では、「連続ラセンタタキ手法、口縁部叩き出し手法」（都出1974）が確立する。外面調整はほとんどがタタキによるもので、細かいタタキ目のものも見られるようになる。内面調整はケズリがほとんどなくなり、ハケ・ナデが主体をなす。

ここで改めて両地域における甕の変遷の要点を比較してみると、瀬戸内地域の外面調整は中期後半にミガキやタタキなどが見られるものの一貫してハケが主流であることが判る。内面調整は中期後半に上半をハケ、下半をケズリとするが、その後は胴部内全面をケズリとする。

一方の近畿では、外面調整が中期後半以降、徐々にその頻度を増しながらタタキのみのものへと移行する。内面調整は、中期末～後期初頭においてケズリが一旦見られるようになるが、基本的にはハケ・ナデが主流である。

さらに、両地域における特徴的な製作技法について確認しておきたい。

まずタタキに関して、この技法が中期後半に両地域で散見されるようになり、以後、近畿で普及してくることは、この時期における両地域間の交

流、さらには両地域以外との接触という状況を推定させる（都出1982、深澤1998）。また、内面ヘラケズリ技法に関しては、瀬戸内で中期後半に定着を見ること、近畿では中期末～後期初頭にのみ多く見られることから、瀬戸内から近畿への何らかの影響が考えられる³⁾。

高坏の変遷

次に、この時期以降、器種構成の一角を占めるようになり、時間的経過の中で相互の影響関係が把握しやすい高坏の変遷を比較してみたい。

瀬戸内（備前）では、碗形と皿形の坏部をなすものがあるが、皿形が主流である。その変遷は口縁部が上方に屈曲し口縁・脚部の端面に凹線を持つものから、口縁部が外反し口縁・脚部の端面をおさめるものへと移行する。特徴的な要素としては、中期末～後期初頭以降、坏部のミガキの方向が横から縦へ、脚部の透かし孔形態が三角形から円形へと漸次変化する点が挙げられる。

近畿（摂津・河内）では、中期後半に碗形と皿形の坏部をなすものがあり、以後、直口口縁の皿形が主流を占めるようになる。その変遷は瀬戸内と類似した状況を呈するが、ミガキの方向が一貫して縦方向であること、透かし孔の形態が一貫して円形であることなどの点で異なる状況が見られる。

このように、高坏に関する両地域の状況からは、後期前半以降、近畿から瀬戸内への影響が推測される⁴⁾。

レベルの異なる交流

甕と高坏から見た両地域の交流を考えた場合、変遷の様相からは移行期を中心として、相互に影響があったことを示している。特に、製作技術の伝播に関しては、遠距離に及ぶ製作者の移動・伝授といった状況が想定されることから、非日常的な交流が存在したと考えられる。その影響の及ぼし方や人の移動を含めた具体的な交流の在り方については後述するが、こ

ここで強調しておきたいことは、中期から後期への移行期にそれまでに見られない遠距離でかつ直接的な交流が生じたということである。

一方、上記のような直接的な交流の表れとは異なる様相も認められる。主な例としては、土器に施される文様の地域性が挙げられる。文様という要素は、視覚的に触れることが出来れば容易に模倣されるという性質を持つが、当時の文様に対する志向性や規制などがある程度の範囲を持って現れるものであり、間接的な交流や共有する価値観の範囲などを示すものと考ええる。

瀬戸内から近畿の中期後半の壺に施された文様の採用頻度を検討した岸本道昭氏の研究によれば、列点文と櫛描文の両者において、吉備地域から播磨地域、摂津地域へとその地理的勾配が見られる（岸本1995）。この両地域間に見られる漸移性は、播磨地域を介したより日常的な交流の結果もたらされた状況と考えられ、瀬戸内と近畿の間に何らかの恒常的な交流が存在したことを示唆するものである。つまり、この時期にはレベルの異なる交流が重層的に保たれていたと考えられ、直接的な交流は櫛描文・凹線文を代表とする共通した土器文化基盤の上に成り立ち得たと推測されるのである。

(2) 近畿における甕の2系統

上記の状況を踏まえ、以下では特に近畿に影響を与えたと想定される甕の製作技術について見ることにする。ここで甕の製作技術交流を取り上げる理由は、移行期に見られる直接的な交流の一現象として位置づけることができるからである。

検討の対象とする地域は、大阪湾沿岸の北部で摂津・中河内の拠点集落を中心とする（図1）。これらの拠点集落では、いずれにおいても瀬戸内の影響を受けた土器が認められ、比較検討に値すると考えられる。

では、対象地域の甕の変遷を念頭におきながら、地域在来のもと瀬戸内系土器の技術影響下にあるものとの差異を確認しておこう（図2）。

まず、この地域に伝統的な甕について、ここではそれを在在地系と呼び、

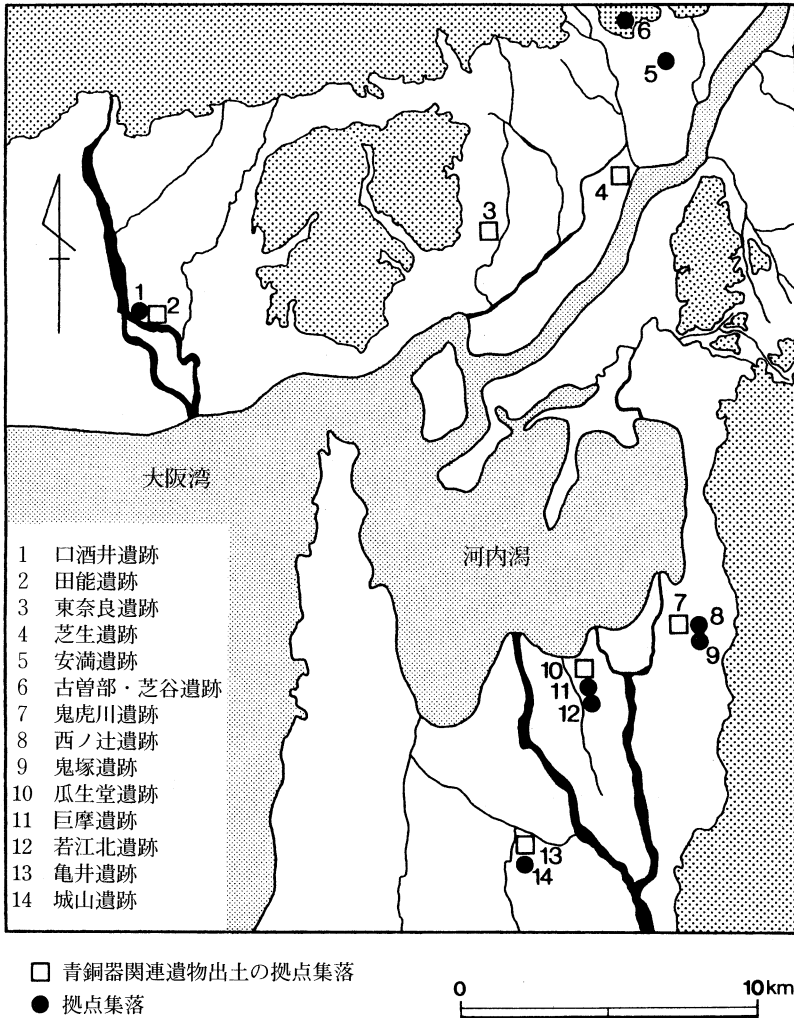


図1 大阪湾沿岸における拠点集落

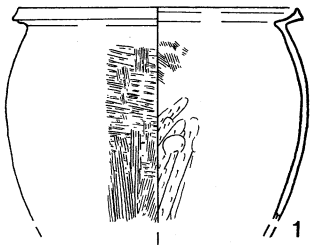
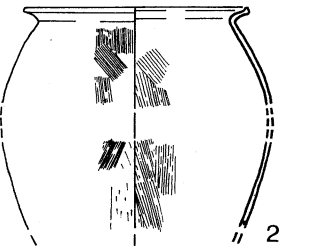
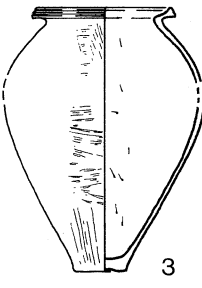
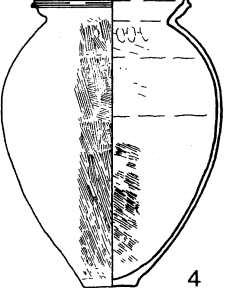
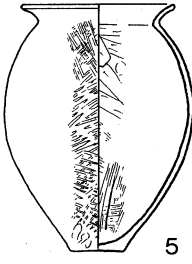
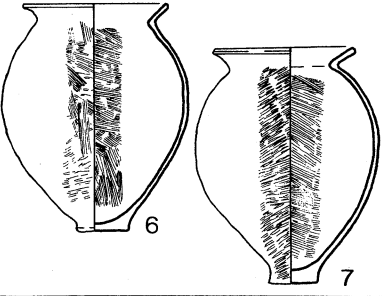
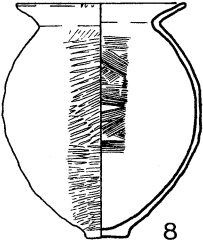
	瀬戸内系	在地系
中期後半		
後期前葉		
後期中葉		
後期後葉	1・5 口酒井遺跡 2・8 東奈良遺跡 3 古曽部・芝谷遺跡 4・6・7 田能遺跡 0 20cm	

図2 甕形土器の変遷 (摂津)

伝統的な製作技術系譜上に乗るものと理解する。その根拠としては、器形や調整法において地域内で連続的な変化が追えること、空間的に主体をなすものであることなどが挙げられる。また、時間的経過に伴いタキの採用頻度が増すことや製作技術に変化が見られることは、土器製作における省略化を伴う内的変化と捉えることができる。

一方、瀬戸内系と捉えられるものにはいくつかのバリエーションが存在する。

第1は、瀬戸内から搬入されたもの（搬入土器）。第2は、胎土が近畿のものであるが、それ以外のすべては瀬戸内の要素を有するもの（搬入型式土器、模倣土器）。第3は、製作技術の上で近畿のものとは異なる要素をいくつか有するもの（折衷土器等）である。

第1・2に挙げた搬入土器や搬入型式土器は、現在のところ数十例が確認されるが、共通した凹線文土器を基盤とするため特徴的な部位や完形品でないと判断しにくい場合が多い。したがって、抽出し得る土器以外にも存在する可能性はあり、概ねあらゆる器種に渡ってその流入が認められることを推測する。

第3に挙げた瀬戸内系土器は、瀬戸内の人が直接製作に関わりながらも、何らかの規制によって瀬戸内の土器そのものを作れず技術上のクセを一部に留める場合、またそのようなクセが代々受け継がれる場合などが想定されるが、それらの場合、瀬戸内の人々が一定期間近畿に居住し、緊密な関係を持ったことが考えられる。このことは、単に物や人が移動したことを示すのみならず、社会変化の一端を反映する集団の移住をも含むものと捉えられ、重要と考える。

その具体的な要素としては、瀬戸内で中期後半以降、一貫して採用される甕の内面ヘラケズリ技法が挙げられる。この技法は、この時期の土器製作技術の中で両地域の差が最も明瞭なものであり、かつ識別しやすいとい

う特徴を持つ。さらに、この技法は土器製作の最終段階に行われ土器の内面であるということから、人間同士の接触による伝達がなければ容易には表れない傾向にあると考える。また、ヘラケズリ技法そのものは中期後半の近畿においても甕・壺の外面前部や高坏の脚部内面に存在するが、瀬戸内系土器との直接的接触が見られる移行期に甕の内面ヘラケズリ技法が顕著となることは、多分に上記のような状況を示唆するのではなかろうか。

このように近畿における甕に関して、在地系と瀬戸内系の2系統が中期から後期にかけて併存することを認識したうえで、次に遺跡出土例に基づいて具体的な様相の経過を見ることにする。

(3) 内面ヘラケズリ技法の導入状況

ここでは、先述の甕の変遷（図2）を元に、近畿において内面ヘラケズリ技法がどのように採用されていったかをその採用頻度から検討する。

(図3)

対象地域は摂津の2地域と中河内の3地域で、いずれも拠点集落を中心とし、瀬戸内集団との接触がうかがえる地域である。扱う資料は当該期の甕形土器で胴部最大径以上の状況が判るものとし、底部のみのものは除外する。

第1地域

摂津の猪名川流域に位置する田能遺跡（尼崎市）、口酒井遺跡（伊丹市）である。これらの遺跡は、後述するように、両者が隣接し事実上同一集落であったと考えられる。

数値が示すように、ここでは中期後半でも新しいと思われる土器群の中に内面ヘラケズリ技法を採用したのが見られる。その率は全体の約1割に留まっており、瀬戸内からの強い影響は見られない。後期前葉になると分析できた個体数は少ないものの、全体の過半数に達するようになる。続

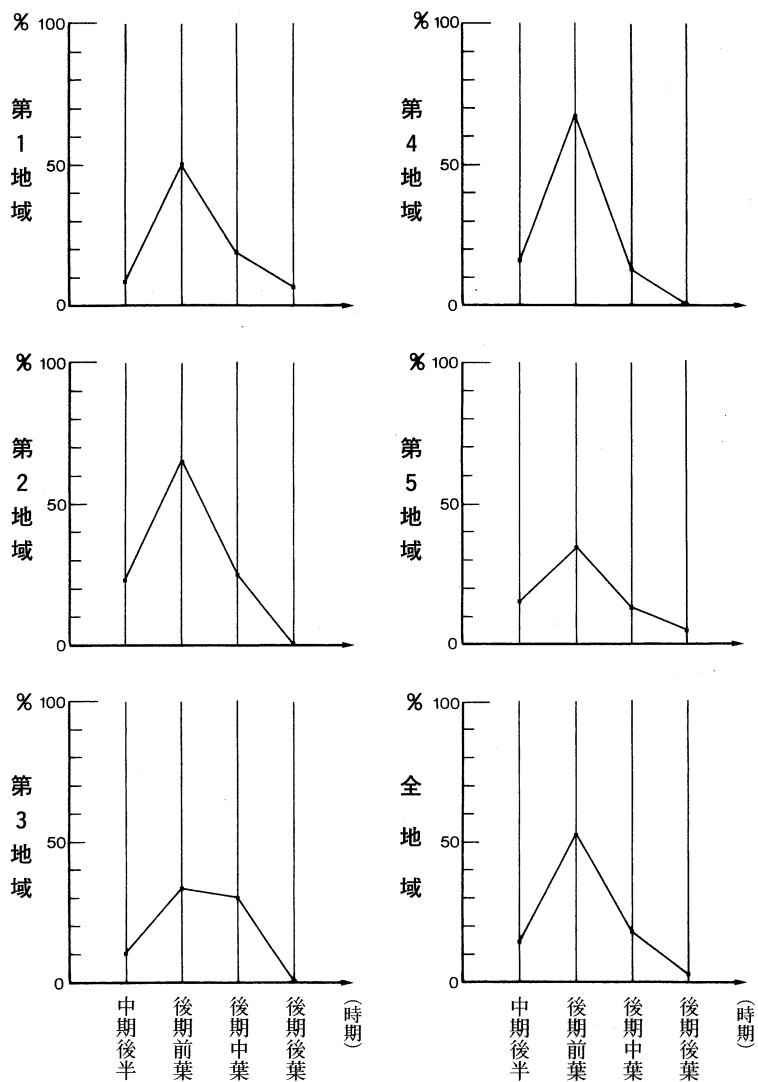


図3 甕形土器における内面ヘラズリ技法の採用頻度

く中・後葉へと時期が下るにつれて再び2割以下の数値を示すようになり、漸次減少していく傾向がうかがえる。特徴としては、後期前葉段階にそのピークを迎えることを指摘できる。

第2地域

摂津の淀川流域に位置する安満遺跡（高槻市）、古曽部・芝谷遺跡（高槻市）、東奈良遺跡（茨木市）である。ここでは、遺跡によって若干の時期的偏りがあるため3遺跡併せて検討する。

ここでも中期後半に内面ヘラケズリ技法の採用が見られる。ただ、資料数が限られているため、現在提示できる主な遺跡は東奈良遺跡のみである。その率は約1～2割に留まり、第1地域に類似した状況を呈する。後期前葉には6割を越える高い数値を示し、ここでも第1地域と同様の傾向が見られる。続く中葉段階では、3割程に下がり、後葉には全く見られなくなる。全体としては、やはり後期前葉にピークを迎え漸次減少していく状況にある。

第3地域

中河内で河内潟に面し生駒山地西側に位置する鬼虎川遺跡（東大阪市）、西ノ辻遺跡（東大阪市）、鬼塚遺跡（東大阪市）である。

やはり、中期後半に内面ヘラケズリ技法の採用が見られ、1割程度の率を示す。後期前葉になると率が上がり約3割の値を示す。そして中・後葉へと時期が下るにつれ、減少していく。

第4地域

同じく中河内で河内潟南岸に面する瓜生堂遺跡（東大阪市）、巨摩遺跡（東大阪市）、若江北遺跡（東大阪市）である。

ここでも、中期後半にその存在が認められるわけだが、特徴的なのは巨摩遺跡の状況である。4割近い高い数値と共に搬入品が多く見られることは、従来から注目されてきた通りである。後期前葉になると、さらにその

率は上がり、特異な状況が顕著となる。しかし、中葉以降、時期が下ると急激にその率を下げることになる。いずれにしても、後期前葉にピークがあることは上記の地域同様である。

第5地域

河内潟からやや南に入った亀井遺跡（八尾市）、城山遺跡（八尾市）である。

中期後半から後期を通じてその存在が認められ、後期前葉における突出度もやはり顕著である。

以上、5地域の全体を通観すると、いずれも中期後半に内面ヘラケズリ技法の存在が認められ後期前葉にピークを迎える。そして、時期が下るにつれて減少し、後葉の段階にはほとんどが消失してしまうという共通した傾向が指摘できる。

一方、地域や遺跡ごとで見ると、それぞれの率の高低に差が表れている。具体的には、内面ヘラケズリ技法の採用頻度が後期前葉に30～50%の数値を示す地域（第1.5地域）、内面ヘラケズリ技法の採用頻度が後期前葉に50%を越える数値を示す地域（第2.4地域）、内面ヘラケズリ技法の採用頻度が後期前葉～中葉に30%前後の数値を示す地域（第3地域）という傾向の異なる3者に分けることができる。この状況は、およそそれぞれの立地条件の違いとも関連している。第1.5地域は、低地部の中央に位置する。第2.4地域は両者の状況が異なる。第2地域はやや内陸に位置するものの大河川に面した低地部と丘陵地から成る。第4地域は河内潟に面した低地部に位置する。第3地域は、河内潟に面した狭い低地部に位置し山地を背後に控える。これら立地条件の違いは、生産力の高低や物資流通の多寡との関連が想定され、集団関係のあり方の違いに反映されているものと思われる。

つまり、低地部における3者においては、生産力を生み出す広い耕作地

を有し、他地域からの流入口としての位置を占めていた第4地域が、瀬戸内系土器の影響を比較的多く受けたと考えられるのである。一方、同様の傾向を示す第2地域については、立地条件の違いを含め新出集落の性格を考える必要があるので次項で触れることにする。

では、次にこれら集落の様相とその性格について考えてみたい。

4. 瀬戸内集団の動向

(1) 瀬戸内系土器出土の集落様相

ここでは、上記5地域の集落様相を見ていくが、第2・4地域については瀬戸内系土器の特徴的な流入状況が空間的に捉えられるので、その側面も併せて考えてみたい。

第1地域は先述したように、両遺跡が隣接しほぼ同一集落と捉えられる。集落の範囲は明確でないが、中期後半を中心とした墓域と考えられる勝部遺跡(豊中市)を含めると相当規模を有していたことが推測される。また、集落からは青銅器の鋳型や製品、ヤリガンナ等の鉄製品を伴出し、この地域の拠点集落であることが再認識される。

第2地域ではこの時期に古曽部・芝谷遺跡が出現する。この遺跡は、芝生遺跡(高槻市)や安満遺跡といった既存の拠点集落と何らかの関係を持ちながら丘陵上に位置していたものと考えられるが、その異質さは瀬戸内系土器の比率が非常に高いこと、豊富な量と器種の鉄製品や分銅形土製品が出土することからうかがえる。

第3地域は、ここで挙げた3遺跡が隣接し、時期によってその範囲を変えながらも同一集落と捉えられる状況が見られる。ここでも、青銅器の鋳型や鉄鏃などが出土しており、拠点集落としての性格が窺える。

第4地域でも瓜生堂、巨摩、若江北の3遺跡が隣接しており、同一集落の可能性を呈している。ここでは、青銅器の鋳型や鉄製品の出土と並んで

貨泉の存在が注目される。

第5地域も同様で、青銅器の鋳型や鉄製品、貨泉などを出土し、拠点集落の内容を備えている。また、亀井遺跡では瀬戸内との関連を示す分銅形土製品が出土している。

以上のように、ここで扱った瀬戸内系土器出土の集落は、いずれも相当規模を有し、金属器関連遺物を伴出する低地の拠点集落であることが確認された。これら既存の拠点集落では、先述のように、瀬戸内系土器の在り方が類似しており、やや状況が異なる第2地域においても安満遺跡や東奈良遺跡、芝生遺跡で同様な状況が窺える可能性が高い⁵⁾。したがって、河内潟周辺におけるこれらの集落には、金属器を中心とする新たな物資流通の構築を軸とした同様な経緯の元に、瀬戸内の人々が移入してきたと解釈する。

その流入状況の典型例が第4地域である。中でも巨摩遺跡では、多くの器種から構成される瀬戸内の搬入品、瀬戸内系土器がまとまって出土しており、瀬戸内集団が移住した第1段階の状況を反映している。ここでの主な発掘調査区から空間的様相を見ると、瀬戸内系土器出土の範囲には偏りがあることが判る(図4)。出土遺構としては、溝や土坑、柱穴、井戸など様々なものが含まれており、移住集団が一定期間生活を営んだことが考えられる。また、一部ではあるが、土器棺などにもその存在が認めら

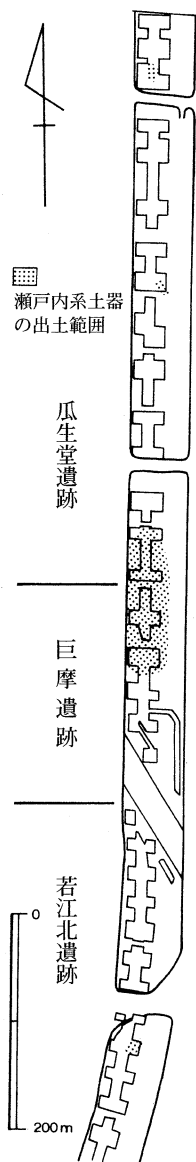


図4 第4地域発掘調査区

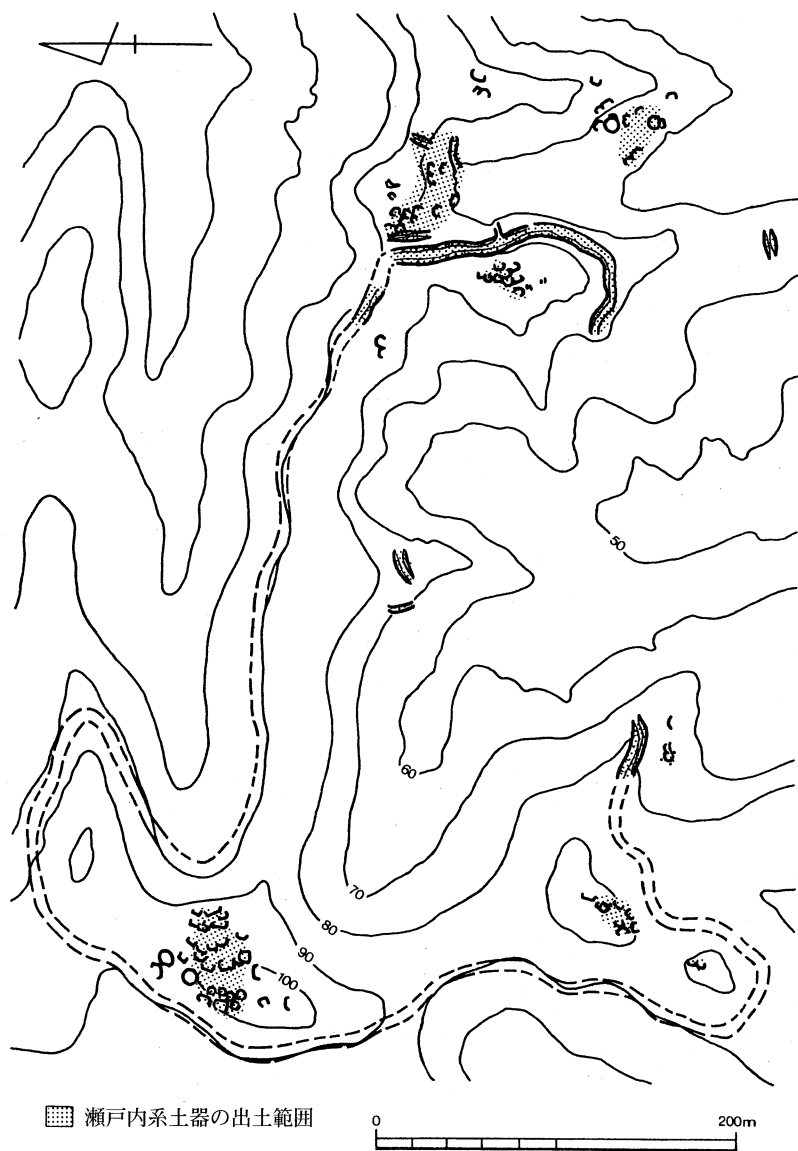


図5 古曽部・芝谷遺跡発掘調査区

れることは、こうした見方を補強するものである。いずれにしても、その当初は拠点集落内に住み分け的に受け入れられたことが推測されるのである。

一方、立地を含めその異質さを呈する古曽部・芝谷遺跡については、大きく二通りの出現経緯を想定する⁶⁾。一つは、瀬戸内の人々が半ば直接的に開拓地としての新集落を形成する状況であり、もう一つは、拠点集落と何らかの交渉を通じて集落内に受け入れられ、その後新集落を形成するという状況である。両者の可能性を比較した場合、拠点集落間の瀬戸内系土器の在り方における類似性から、拠点集落における一定の受け入れが行われたことは見てきた通りであり、中期に構築された近畿の物資流通ネットワーク（酒井1984）を中心とした地域間関係の存在を考慮すると、後者の状況がより妥当であると思われる。

さらに、このことを考えるために集落内における瀬戸内系土器の出土状況を見てみたい。図5は集落の遺構配置図と瀬戸内系土器の出土範囲を示したものだが、これから判ることは住居や環濠など遺跡全体に均一にその存在が認められることである。その状況は在系土器と共存しており、移住集団が数世代を経た段階の様相であると捉えうる。また、近江系土器の存在など、前時期から拠点集落で見られた他地域との交流も認められ、既存の集落が基盤となったことを推測させる⁷⁾。

したがって、このようなタイプの遺跡は、瀬戸内集団が既存の拠点集落と交渉し受け入れられた後、地域の地理的・社会的状況に応じて出現したと考えられる⁸⁾。

（2）瀬戸内集団の受け入れ過程

最後に、これまで見た瀬戸内系土器の変遷と瀬戸内系集団の動向を踏まえて、近畿の拠点集落を中心とした瀬戸内系集団の受け入れ過程を考えて

みたい。

第1段階は、一部の搬入品と共に移住してきた段階で、瀬戸内の伝統的技術が見られるようになる。多くは各地域の拠点集落に入ってくるが、特に青銅器生産を行っていたと考えられる集落との関わりが想定される。また、そういった集落では同時に鉄器を伴出するが多い。時期は中期後半にあたり、近畿集落との交渉期と捉えられる。集落内における瀬戸内系集団の割合は内面ヘラケズリ技法の採用頻度から推測して1割程度であり、拠点集落の許容範囲におさまる程度の移住が存在したと考えられる。

第2段階は、引き続き拠点集落へ移住してきた段階で、瀬戸内の技術を留める。状況としては、拠点集落の拡大、分村化に伴って、前段階の世代も含めて在地集団に同化していくことが想定される。集落内における瀬戸内系集団の割合は、既存の拠点集落で3～5割、新集落で6～7割とそのピークを迎える。拠点集落については、対象としたほとんどの地域で同様な範囲の数値を示すことから、その状況が受け入れ体制の限度をおおよそ示すと推測されるが、新出集落については、飽和状態への対応の一樣相を示唆するものとする。時期は後期前葉にあたり、近畿集落との社会的関係が進展する段階と捉えられる。

第3段階はほとんど移住がなくなる段階で、一部に瀬戸内の技術を留めるにすぎない。つまり、この状況は、前段階以前の移住において伝授された技術が、数世代を経て淘汰されたことを示していると考え得るのである。時期は後期中葉に当たり、新たな物資流通の確立に伴って移住集団が減り、近畿集落との関係が安定した段階と言えよう。

5. おわりに

以上のように、近畿における瀬戸内系土器のあり方から、移行期（中期末～後期初頭）を中心として断続的に移住してきたと推測される瀬戸内集

団が、近畿に伝統的な土器製作技術を伝えたと解釈した。また、それは一部において代々受け継がれることで残存しつつ、徐々に消滅していったと想定される。その過程では、金属器等を伴出する主要な拠点集落が交渉の窓口もしくは受け入れ口となって展開したと考えられ、そのような金属器等を中心とした物資流通の活発化が密接に関連していたことであろう。つまり、瀬戸内系土器の動態から窺える集団の長距離移動や移住といった現象は、鉄器を中心とした新たな経済活動が生じていたことを反映しており、その動向は社会関係の変化に大きな影響を与えたものと推測しうる。

ただし、こういった想定は西日本や大陸の多様な状況を踏まえ検討することが必要であり、今回扱えなかった瀬戸内系土器の西への動きも含め、改めて論じることにはしたい。

本稿は、1999年1月に大阪大学文学研究科に提出した修士論文の一部を書き改めたものである。執筆にあたっては都出比呂志先生、福永伸哉先生に御指導を賜った。また、杉井健氏（熊本大学）、佐々木憲一氏、清家章氏をはじめとする大阪大学考古学研究室の皆様には有益な助言をいただいた。そして、資料調査においては、伊丹市教育委員会、茨木市立文化財資料館、大阪府文化財調査研究センター、古代吉備文化財センター、高槻市立埋蔵文化財調査センター、尼崎市立田能資料館の他多くの方々にお世話になった。末筆ながら、厚くお礼申し上げます。

注

- 1) ここでは主に前者を備前・讃岐を中心とする中部瀬戸内、後者を摂津・河内を中心とする大阪湾沿岸の畿内として対象地域を限定する。
- 2) ここで基層の要素を採用する理由は、深澤氏が指摘したように土器の作り手が関わった「第一義的な地域性」として捉えられるからであり、人の移動・移住がより明確に跡づけられるからである。
- 3) 「内面ヘラケズリ」技法の系譜問題については検討の余地があるが（藤田

1984)、現状として瀬戸内の中期～後期に盛行し、近畿ではそうでなかったことは認められる状況である。また、技法そのものについては、森岡氏が庄内式土器以降の技法と区別して「内面荒掻き技法」と仮称しているが(森岡1982)、ここでは器面を削って仕上げるという点で特に区別せずに「内面ヘラケズリ技法」と呼称する。

- 4) 後期以降の高坏については、本文の状況がうかがえるが、その発端は移行期における瀬戸内から近畿への影響が推測される。この点については別稿で論じることしたい。
- 5) これらの拠点集落における中期後半～後期前半の資料は、充分公表されていないため検討し得なかった。しかし、芝生遺跡の公表されている資料(森田1990)や青銅器生産関連遺物・青銅器を伴出するという性格から同様な状況が推測しうる。
- 6) ここでは、搬入土器出土の多さを軸とした内容の特殊性を重視して、瀬戸内集団の流入が契機となって出現した集落として扱うことにする。
- 7) 拠点集落を基盤とした分枝集落のあり方は、西摂地域で指摘されている(森岡1982)。
- 8) 中期～後期にかけて丘陵上に集落が出現することは、集落の大規模化(人口増加)や谷水田の開発の結果とする考え(寺沢1974)や、軍事的緊張への対応とする考え(都出1974)などがあるが、いずれにしてもその中で瀬戸内集団の流入が大きな位置を占めたと考える。

図版出典

- 図1 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ(北遺跡群 中期編)』を元に改変。
- 図2 いずれも報告書より一部改変し再トレース。
- 図4 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ(北遺跡群 中期編)』より一部改変し再トレース。
- 図5 高槻市教育委員会1996『古曽部・芝谷遺跡』より一部改変し再トレース。

参考文献

- 井藤暁子1982a「近畿3」『考古学ジャーナル6月号 No205』ニュー・サイエンス社
- 井藤暁子1982b「近畿4」『考古学ジャーナル8月号 No207』ニュー・サイエンス社
- 井藤暁子1983「近畿5」『考古学ジャーナル6月号 No219』ニュー・サイエンス社

ス社

岸本道昭1995「播磨弥生中期後半の土器編年新考」『養久山・前地遺跡』龍野市教育委員会

岸本道昭1998「播磨弥生後期前半土器の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』龍野市教育委員会

小林行雄・佐原真1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会

酒井龍一1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財學報』第3集奈良大学文学部文化財学科

佐原真1968「畿内地方」『弥生土器集成』本編2

設楽博己1997「弥生時代の交易・交通」『考古学による日本歴史9 交易と交通』雄山閣

田代克己1986「石器・木器をつくるむら、つくらないむら」『弥生時代の研究7 弥生集落』雄山閣

都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に—」『考古学研究』第20巻4号考古学研究会

都出比呂志1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社

都出比呂志1983a「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第29巻4号考古学研究会

都出比呂志1983b「弥生時代における地域色の性格」『信濃』第35巻4号

都出比呂志1989「交易圏と政治組織」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

寺沢薫1974「大阪湾沿岸地域における弥生時代遺跡群の展開とその社会（上）・（下）」『古代学研究』72・73 古代学研究会

寺沢薫1985「弥生時代舶載製品の東方流入」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズ刊行会

寺沢薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

豊岡卓之1987「青銅武器の東辺」『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会

野島永1996「近畿地方の弥生時代の鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 京都府埋蔵文化財調査研究センター

深澤芳樹1986「弥生時代の近畿」『岩波講座 日本考古学 五 文化と地域性』岩波書店

深澤芳樹1998「東海洋上の初期タタキ技法」『一色青海遺跡 自然科学・考察編』愛知県埋蔵文化財センター

- 藤田憲司1984「『搬入土器』研究の課題—巨摩・瓜生堂遺跡報告の検討から—」
『大阪文化誌』第17号 大阪文化財センター
- 前田佳久1988「吉備系遺物の検討—弥生時代、河内を中心にして」『考古学論
集—網干善教先生華甲記念集』網干善教先生華甲記念会
- 正岡睦夫1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
- 松本武彦1996「日本列島の国家形成」『国家の形成』三一書房
- 溝口孝司1987a「土器における属性伝播の研究—凹線文の発生と伝播—」『東ア
ジアの考古と歴史（中）岡崎敬先生退官記念論集』同朋舎出版
- 溝口孝司1987b「土器における地域色—弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素
材として」『古文化談叢』第17集 九州古文化研究会
- 三好孝一1993「近畿地方における青銅器生産の諸問題」『古文化談叢』第30集
（中）九州古文化研究会
- 森岡秀人1981「東六甲の高地性集落（上）」『古代学研究』96 古代学研究会
- 森岡秀人1982「東六甲の高地性集落（中）」『古代学研究』97 古代学研究会
- 森岡秀人1996「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」『考
古学研究』第42巻4号考古学研究会
- 森田克行1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅱ』木耳社

遺跡調査報告書

- 尼崎市教育委員会1982『田能遺跡発掘調査報告書』
- 伊丹市教育委員会1988『口酒井遺跡 第11次発掘調査報告書』
- 茨木市教育委員会1988「東奈良遺跡」『昭和62年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会1990「東奈良遺跡」『平成元年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会1991「東奈良遺跡」『平成2年度発掘調査概報』
- 瓜生堂遺跡調査会1973『瓜生堂Ⅱ』
- 瓜生堂遺跡調査会1981『瓜生堂Ⅲ』
- 大阪府教育委員会1976『東奈良遺跡発掘調査概報』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1980『瓜生堂』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1986『城山（その1）』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1986『城山（その2）』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1986『城山（その3）』
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター1987『亀井（その3）』
- 大阪府教育委員会1980『亀井・城山』
- 大阪府教育委員会1981『巨摩・瓜生堂』
- 大阪府教育委員会1983『亀井』

- 大阪府教育委員会1987『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要Ⅳ』
- 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ（北遺跡群 中期編）』
- 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ（北遺跡群 後期編）』
- 大阪府文化財調査研究センター1984『亀井遺跡Ⅱ』
- 大阪府文化財調査研究センター1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 第5次』
- 高槻市教育委員会1977『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査』
- 高槻市教育委員会1988『芝生遺跡』『昭和59・60年度 高槻市文化財年報』
- 高槻市教育委員会1996『古曾部・芝谷遺跡』
- 東大阪市教育委員会1979『鬼塚Ⅱ・若江遺跡』
- 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会1987『西ノ辻遺跡第6次、第7次、第8次調査概要報告・鬼虎川遺跡第18次発掘調査報告書』
- 東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会1992『西之辻遺跡23次発掘調査概報』
- 東大阪市文化財協会1984『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3—遺構編』
- 東大阪市文化財協会1989『西ノ辻遺跡24次発掘調査概報』
- 東大阪市文化財協会1990『西ノ辻遺跡21次発掘調査概報』
- 東大阪市文化財協会1990『西ノ辻遺跡26次発掘調査概報』
- 東大阪市文化財協会1994『西ノ辻遺跡36次発掘調査概報』
- 東奈良遺跡調査会1976『東奈良』

（大学院後期課程学生）